

ければなりません。今日限りもう食物を上げないから、各自でお暮しなさい。」と云ひ渡しました。其處で三疋の子猿は各自に足の向いた方へ別れて行きましたが、先づ一番目の猿は、藁束を持つてゐる人の所へ行つて、それを少し貰ひ受け、それで自分の住家の小屋を建てました。すると或日の事、一疋の狼がやつて来て「一緒に遊ぶから、此方へ出て来ないか。」と誘ひかけましたが、猿は狼の謀を知つてゐたので、小屋の中から出ませんでした。狼は大變腹を立てて、その小屋を壊して、猿を食べて了ひました。二番目の猿は、それを聞いて非常に恐れて、刺のある木をたくさん集めて来てそれで家を建てました。所がこれも亦、狼のために小屋を壊されて食られて了ひました。三番目の子猿は兄弟の内でも一番賢い子でしたので、家を建てるのに遠く山の麓迄行つて、煉瓦をたくさん集めて来て、それで家を建てました。狼はこの小屋へもやつて来ましたが、煉瓦ではさすがの狼も壊す事が出来ませんで、口惜しがつてゐました。

が或日一計をめぐらし、「猿さん、この裏の畑に君のお好きな蕪が澤山有ります。朝早く行つて取つてらつしやい。」と云ひました。猿は好きな蕪があると聞いてその翌朝早く畑へ出て、蕪を澤山取つて来ました。いつたいこの猿は早起なので、狼は猿を畑へ呼び出して食べて了はうと思つてゐたのですが、起き出して行つて見ると、もう猿は蕪を取つて歸つて了つたあとでしたので、すぐその足で猿の所へ行くと、猿は蕪を一ぱい鍋に入れて、旨さうに喰べてゐる所でした。狼はそれを見て残念に思ひ、「この上の林に澤山林檜が生つてゐるから、明日の朝早く行つてらつしやい。」と云ひ残して歸つて行きました。そしてその翌朝は早く起きて、まだ猿は来てゐなからうと思ひながら林へ行くと、もう猿は木に登つて、林檎を食べてゐました。そして狼を見ると、「この林檎は大變旨うございますよ。」と云ひながら、ボンと二つばかりの林檎を遠くへ放りましたので、意地の汚い狼は早速走つて行つてその林檎を食べました。そのひまに猿は素

早く木から下りて、小屋へ逃げ歸つて了ひました。それと氣づいた狼はすぐ猿の小屋へ行つてその小屋を壊して家へ這入つてやらうと窓の所をくづしかけました所、その時窓の下の釜で湯を沸してゐた猿は、いきなりその湯を狼にかけましたので、さすがの狼も赤く爛れて殺されて了ひました。

〔訓言〕 智慧ある人は身が守れます。

十二月八日 獺

と 猫

或時一疋の獺が川から上つて来て、猫に、『どうか私を、鼠取りにいつしよに連れて行つて見せて下さい。私は始終、河の中にばかり居て、魚を喰べてゐる事にもう倦きました。』と申しました。然し猫は、馴れない獺が鼠を取りにいつしよに行くのは、邪魔ばかりでなく危い事だと思ひましたので、いろいろと諫めたり止めたりして見ましたが、どうしても聞き入れません。其處で仕方なく、二

人は出掛けて行きました。獺は『私は川の中で小魚などを捕りつけてゐますから鼠を捕るのもわけはありません。』などと、充分経験のある様な事を云つてゐました。二人は藏の中へ這入ると、暗い所ですから、いつか別れ別れになつてゐました、その中猫は多数の鼠を捕つて、もう充分喰べたので、歸らうと思つて獺を呼びましたが、中々獺は出て来ませんので、どうした事かと、方々を探して見ますと、獺は、半死半生になつて口を開けて、はあはあ云つて倒れてゐました。そして元より川に棲んでる、生臭い獸の事として、尾の方は大分鼠共に喰はれて了つてゐました。猫は自分が連れて来たのだから、自分に責任のある事と思つて、その死にかゝつてゐる獺を引き摺つて行つてもとの川の中へ入れてやりました。

〔訓言〕 伶俐なものは自分の畑以上の所へ手出しなどはしません。

十二月九日 大豆の蟲

畑にいつ迄も居残つてゐた大豆についてゐた蟲が、大豆と共に切り取られて、八百屋へ連れて來られました。畑を出る時に蟲はもういい加減で、その豆をよして外の物へ移ればよかつたのに、もつと心まで喰べて了ひたいと思つたので、とうとう八百屋へ連れて來られて了つたのです。そこへ一人の人がその大豆を買ひに來ました。蟲は自分のくつついてる枝が持ち上げられると、びくびくしながら外の野菜に移つて了はうかと思ひましたが、まだ喰べのこした所があるので、それが惜しくつてなほも豆についてゐました。所がその人はそれを買つて行つて、すぐに鍋に湯を煮立て、その中へ入れて了ひましたので、欲張つてゐたその蟲は到頭燂で殺されて了ひました。

(362)

〔訓言〕 先をよく見て、ものはいいい加減に切り上げる事が

必要です。

十二月十日 林檎の木

或る百姓家の近くに、一本の古い林檎の木がありました、毎年澤山の美しい果實がなるのでした。百姓はこの樹に果實が熟るのを待つて近所の人達と一緒、それを取りに行つては分け合つてゐました。ところがその實があんまりよく熟るものですか、その百姓は慾心を起して、いつそみんな自分のものにしよ、と、その樹を自分の庭へ移し植ゑて了ひました。さて移し變へて見ますと、林檎の樹は今迄と違つて少しも勢がなくなり、間もなく枯れて了ひました。それを見て百姓は溜息を吐きながら「ああああ情ないことになつて了つた。自分だけでみんな儲けようと思つて、却つて一つも得られなくなつて了つた。それで來年からは楽しみにしてゐた林檎も食べられなくなつたのだ。」と云ひました。

(363)

〔訓言〕 慾心の深い者はかうした失敗を招くやうなことが
あります。

十二月十一日 禿頭になつた男

或る處に、胡麻しほ頭の男がありました。どうした譯かその男には、年をとつたのと、若いのと、二人のお内儀さんがありました。すると年をとつた方のお内儀さんは自分の夫が自分より若く見えるのを厭がつて氣にしては男の頭の黒い毛を抜くのでした。それに引替へ若い方のお内儀さんは、自分の夫が白髪のおぢいさんに見えるのを厭つて、暇さへあれば男の白髪を抜くのでした。そのためいつの間にかこの男の頭には一本も髪がなくなつてすつかりの禿頭になつて了ひました。

〔訓言〕 兩方に氣に入るやうなことをしようと思つて自分

の身が立たなくなるものである

十二月十二日 森 と 火

雪の積つた寒い山中を旅行してゐた人達が、森の傍で焚火をして、その燃え残りをそのまゝにして又出發しました。火は漸々勢力が弱くなつて今にも消えうせようとなりました。そこで火は森の木に向つて云ひました。

『お氣の毒にあなたは雪に埋つて、寒さに慄へてゐなされる。私は太陽の兄弟です。雪の中でも寒さを知りません。ごらんなさい。私の身のまはりにはこの通り雪がみんな融けてゐますよ。ですから春や夏のやうに暖く、なりたければ私をあなたの傍へ置いてごらんなさい。』

火から斯う云はれた森は、火を自分達の仲間へ入れることを許しました。すると火はみるみる中に太い枝や小枝を走せ廻つて、黒煙は朦々と空高く立ちのぼ

り、見るも恐ろしい火焰が忽ち森全體を包んで了ひました。そしてすつかり灰になつて了ひました。

〔訓言〕 和慾を懷いた者を友達とすると自分を滅ぼすやうな

ことがあります。

十二月十三日 三人の召使

或る時三人の召使を使つてゐます主人が、その召使達の精神を試めすために、自分の部屋へ三人を呼びました。そして部屋へ来る廊下へ大きな石を横たへて置きました。

三人が部屋へ集るのを待つて主人は「お前達が此處へ来る時に廊下に大きな石があつたらう。お前達はあの石の處をどうして來たな。」と訊ねました。

第一の召使は「はい、私は石が御座いましたから外の廊下を通つて參りまし

た。」と答へました。

第二の召使は「私あの石を乗り越して參りました。」と云ひました。

第三の召使は「私あの石をお庭へ運んでから參りました。」と告げました。

三人の答を聞き終つてから主人は云ひました。

「石があるからと云つて外の道を廻るやうな者は、少し位ゐるの難事によつかる、と、すぐなんでもすることを止して了ふ意氣地なしで、とても立身出世の見込がない。又それを乗越すやうな者は、その困難を切抜ける勇氣はあつても自分さへよければいいと云ふ勝手な氣持ちの男に違ひない。矢張り眞實に正しい人間ではないのだ。けれども道を塞ぐ邪魔物を自分の爲に、そして他人の爲に除け去るやうな者は眞實に勇氣もあり、正しい精神の男に違ひない。」と云つて、第三の男を讃めました。

〔訓言〕 人の精神はその一言一行で直ぐ分るものです。

十二月十四日 二人の僧侶

二人の僧侶が、或る雪の積つた山中を旅してゐます時、路傍に一匹の野兎が凍え死んでゐるのを見つけました。すると一人の僧侶はそれを拾ひ上げ、木の下の土を掘つて埋めてやり、一生懸命お経を上げ初めました。それを見てゐたもう一人の僧侶は、さもさも不平らしい顔をして「君下らないことをするものぢやない。いくら僕達が僧侶で、死んだものを葬ふのが役目だからと云つたつて、こんな野兎のためにお経を上げて、一文のお禮も貰らへやしなないぢやないか、そんなものはかまはずにさア行かう。」と云ひました。

斯う云はれて相手の僧侶は、

「そりや、一文の儲けにもなりはしない。けれども僕はそんなことを考へてはゐない。考へたくもないのだ。僕は只だ、この兎が可哀相だから葬つてやりた

いのだ。」と。答へました。

〔訓言〕 眞實の慈悲深い人と云ふものは、斯う云ふ風に何の報酬もないのに善事を行ひます。

十二月十五日 醫者の言

醫者が或る人に言ひました「どんな病人でも俺のことを悪く云ふ者はない。するとその人は答へました「勿論誰だつてそれは云はないだらうさ。死んで了つた人は何も云ふまいからね。」

〔訓言〕 死人に口無しとはこの事です。

十二月十六日 二人の百姓と雲

或る時一人の百姓が黒雲の動くのを見て隣の百姓に云ひました。「あれを見な

さい、黒雲があんなに動いてゐる。きつと霰が降るに違ひない。そして俺達の穀物を打つ潰して了ふだらう。さうなりや今年は恐ろしい饑饉だ。」と、それを聞いて隣の百姓は「お前は下らないことを云ふもんだなア。霰なんか降つて、たまるものか、あの雲は雨雲だよ。もう長いこと日照りが續いてゐるから、雨に違ひないとも。さうすりや穀物も十分實ると云ふものだなア。」と云ひました。けれども前の男は尙も云ひ張つて、

「いや霰が降るに違ひない。」と云ひました。

「いや雨が降る。」相手の男も負けずに云ひ張りました。

「いや霰だ。」

「雨だとも。」

さうして二人はとうとう殴り合ひの喧嘩を初めて了ひました。そして霰も雨も降らない先に、二人の顔からは血が流れ出しました。

さうかうしてゐる中に、黒雲はすうつと通り過ぎて了ひました。

〔訓言〕 自分達の感じだけでものを決めて云ひ張るもので

はありません。

十二月十七日 龍 と 人

或る人が馬に乗つて河邊へ行く路を通つてゐますと、一匹の龍が路傍にうづくまつてゐるのに出會ひました。龍はその人を見ますと、

「もしもし、私は水の中に棲んでゐる動物ですが、こんな陸へ上つて了ひ、困つてゐます。お禮の金はいくらでも差し上げますから、どうぞ私を河の所まで馬に乗せて行つて下さい。」と頼むのでした。

それでその人も龍を哀れに思ひましたので、馬に乗せて河邊まで連れて行つてやりました。そしていざ報酬の金を呉れと云ひますと、龍は俄に恐ろしい顔を

して、「何を云ふのだ。馬に縛りつけて、俺の體をこんなにいたい目に遭せながら、金をせびるとは蟲がいい」と云つてくつてかかりました。そんな譯で兩方で争つてゐますと、そこへ一匹の狐が來まして、兩方の争つてゐる譯を聞きただしましてから、それなら自分が判をつけてやると云つて「先に縛りつけた様子は何んな風だつたか。」と訊ねましたので、龍は「斯う云ふ風にだ。」と云つて、前のやうに馬の背に乗りました。狐は「それでどんなに固く縛つたのか。」と訊ねましたので、その人は「この位だ。」と云つて前の様に龍を縛りました。するとその時、狐はその人に向つて「こんな無理無法な奴は本の場所へ連れて行つて了ふ方がいい。」と云ひました。その人もなる程と思つて、そのまま又龍を元の場所へ連れ戻つて置きにして了ひました。

〔訓言〕 人から恩を受けながら、その恩返しをしないやうな者はこの龍みたいな報があるものです。

十二月十八日 獅子と馬

或時一頭の馬が、野原で草を喰べてゐますのを獅子が見て、なんとかあの馬を喰殺してやりたいと思ひましたが「下手に飛びかかつて行けば逃げられて了ふ、一つうまい計略で捕へてやらう。」と思ひ、いろいろ考へた末、さも馴々しい様子をして馬の傍へ近寄つて行きました。そして「僕は近頃、お醫者の稽古をしてゐる、君の體にどこか悪いところはないかえ、痛いところでもあるなら見てやる」と云ひました。けれども、馬は獅子の計略を早くも見てとつたものですから「それは幸です。僕は今足に刺を踏立て、歩くことが出来ないで困つてゐるところです。どうぞ療治して下さい。」と云ひました。そして片足を上げましたので、獅子が頭を差し出したところを、いきなりその眼を的つて蹴飛ばしましたので、さすがの獅子も眼を廻して倒れて了ひました。それで馬は樂

樂と逃げる事が出来ました。

〔訓言〕 悪企みで他人を誑さうとするやうな者は矢張り成
功はしません。

十二月十九日 自惚な土器

或る土器作が、土器を作らうと思つて、土を堅め、それを日向に干して置きま
した。すると土器は「俺は何んと云ふ好運なのだらう。下らぬ奴等に踏みつけ
られてゐた土の身分であつたのが、斯うして立派な土器に作られ、尊い人達の
おなぐさみの品になるのだもの。眞實に大したこつた。」と獨て自分の身を自慢
してゐますのを空の上で雨の神がお聞きになつて、生意氣な奴だと思はれ、俄
に大雨をザーツとその土器の上へ降りそそぎになりました。その爲未だ焼いて
ない土のままの土器は一トたまりもなく、もとの土になつて了りました。

〔訓言〕 自分の身分の尊いことを誇つてゐると、いつ何時
不時の禍が起つて來て身の破滅を招くか知れませぬ。

十二月二十日 お伴の犬

或る家の主人が友達を招いで御馳走をしました。そして友達が出かけに行く
時、その飼犬も主人の後について矢張りその家へ行きました。するとその家の
飼犬も主人の傍にゐて、友達の犬を見て「これはよく來たね。今夜は一緒に御
馳走にあづからう。」と云ひました。友達の犬もその言葉を嬉しく思ひ、「これは
大した御馳走だ。いい處へお伴をして來たものだ。」と云つて嬉しまぎれに尾を
揮りますと、その揮つた尾がお料理に塵をかけたものですから、料理人が腹を
立て「こ奴どこの犬つころだ、無禮な。」と云ふなり、友達の犬をいきなり窓から
投げ出して了りました。

〔訓言〕 他人の後に附いてゐる者はいつか獨りに投げ出されることがあります。

十二月二十一日 雉

枯野の中に一羽の雉が棲んでゐました。その雉は非常に聲のいい雉でした。或る時一人の獵師が鐵砲を擔いで、なにかいい獲物はないかとその枯野を探し歩いてゐますのを見た雉は、自分のいい聲を獵師に聞かせてやらうと、妙な自信れ心を起しまして、一聲高く啼きました。そのため獵師は雉がその邊にゐることを知つて、聲がした方へと枯草を押分けて捜し始めました。そしてとうとう雉の姿を見付け出して、鐵砲で雉を射止めて了ひました。

〔訓言〕 雉も啼かすば撃たれまいとはこの事です。

(376)

十二月二十二日 凧 と 雀

雲の中まで揚げられた凧がずっと下を見降して、一羽の雀が松の木梢に止つてゐるのを見つけて『おい、雀君、ここから見降すと君はまるで豆粒程の大きさにも見えないぢやないか。どうだえ、こんなに高く飛ぶのを見たら羨ましいだらう。』と叫びました。すると雀は斯う云つて答へました。

「羨ましい？ 冗談言つちやいけない。何が羨ましいものか。君は自分のことを大變偉さうに思つてゐるけれど、いくら高く昇つてゐても、君は縛られて飛んでゐるのぢやないか。そこへ行くと僕なんか高くはないさ。高くはないけれど自分の思ふ所へ自由に飛んで行ける。そして君みたいに他人の慰物にされてなんかないからね。」

〔訓言〕 いくら高い身分の人でも自由な生活の出来ない者

(377)

は幸福ではありません。

十二月二十三日 樽

或る人が、その友達に頼まれて、水樽を貸してやりました。けれどもその友達達が樽を借りに来たのは酒を容れるためでした。それで家へ持つて歸つて二三日の間酒をその樽に容れて置きましたので、その樽には酒の香がすっかり浸み込んで了ひました。そしてその香が抜けないため、持主はもうその樽を返して貰つても水を容れることが出来なくなつて了ひました。

(378)

〔訓言〕 一度悪習慣に染まるとなかなかそれが抜けないものです。

十二月二十四日 樵夫の博士

昔、或頓智のいい一人の樵夫が居ました。或日薪を車に積むで、都へ賣りに出かけますと、とある一軒の立派な學者の家で、それを残らず買つてくれました。樵夫はお金を受け取りながら庭口から奥の方を覗いて見ると、其處に先生が安樂椅子に倚りかかつて香りのいい葉巻をふかしながら本を見てゐました。それを見て樵夫はつくづく考へ、自分もどうかして學者になりたいと思ひ、家へ歸ると、すぐに今迄使つてゐた車も牛も馬も賣り飛ばして、都で見えて来た學者の家のやうに、邸を作りかへ、住居の入口に「何でも大博士」と書いた看板を下げて、自分に讀めるだけの本を讀み出しました。間もなくこの村で大金持の名主さんの家で、大金が失くなり、その盗人の詮索をこの「何でも博士」の所へ聞きに來ました。

(379)

其處でその樵夫の博士は、その晩名主の家へ呼ばれて行きました。所が夕方なので名主は先づ夜食の御馳走を出しました。やがて給仕の者が一の膳を運ん

で來ましたが、樵夫は一の膳といふ言葉を知らず、妻の方を向いて『これが一番だな。』と云ひました、それを聞くと給仕は青くなつて、室を周章て出て行きました。そして臺所へ行くといきなり仲間の給仕に向つて、『よく氣をつけろあの博士は知つてるぞ。』と云ひました。やがて二の膳三の膳と運ぶたび、樵夫は前のやうな事を云ふので、大金を盗んだ給仕達は青くなつて、食事がすむとそつと博士を呼び出し、穴藏へ連れて行つて、そこにかくしてある盗んだ金を見せ、自分達の盗んだ事を白状して平謝りに謝りました。

そこで博士は又元の席へ戻りますと、『先生盗人はどの邊に居りませう。』といふ名主を黙つて後に従へて、以前の穴藏へ行き、金の在所を指さしました。名主は流石博士だけがあると、驚き、且喜び、澤山のお禮ものやら土産物を送りましたとさ。

〔訓言〕

悪い事をしたものは、いつも心が穏やかでないの

で、自分から破滅するやうな事が往往あります。

十二月二十五日 眞珠姫

或所に二人の娘をもつた母親が居りました。姉娘は繼子で妹娘は實の子でした。母親は毎日毎日妹娘をのみ着飾らして連れて歩き、姉娘はいつも留守をして、臺所の用事をしてゐました。或日その國の御殿で國中の若い娘を集めて舞踏會を開きました。母親は又例の通り妹娘を美しく飾りたてて、出かけて行きました。姉娘は、めつたに見る事の出来ない御殿の内へ自分もどうかして行つて見たいと思つて思案して居りましたが、行くにも着物はなく、多數の用事は云ひつかつてゐるので泣く泣くあきらめて、臺所の仕度やら云ひつかつた用事を済ませて、一人寂しくせめてもの心やりに亡き母の墓參に出かけました。所が墓場で姉娘が一心に祈念して居ると、何處から來たのか一羽の白鳩

が飛んで來まして、はつと思ふ間に娘の傍に、色々な美しい着物やら寶石やらを置いて行きました。娘は夢ではないかとばかり驚き喜んで、早速それを身につけるとお城へ出かけて行きました。御殿の内にはもう目覺むるばかりに美しい女達が集つてゐましたが、誰れもこの姉娘の衣裳や髪飾りに匹敵するものはないほど、輝きを見せてゐました。そして誰れいふとなくこの娘を眞珠姫と呼び出しました。繼母も妹も勿論それが姉娘とは氣がつかまませんでした。その内その御殿の王子はこの眞珠姫に目をつけられ、其内舞踏の相手を選び出されましたが、眞珠姫は繼母に内密で來た事として、長い間のお相手も出來ず、早々御殿から歸らねばなりませんでした。王子は中々許しませんでした。仕方なく、眞珠姫の知らぬ間に、そつと姫の金の靴を片方取つてかくしておしまひになりました。眞珠姫は歸りにお墓へ立ち寄つて着物を着かへて急いで家へ歸り繼母と妹の歸るのを待つてゐました。やがて母親と妹は歸つて來て、今日の噂の眞珠

姫の美しかつた事、何處の娘だらうといふやうな事を、姉娘とは露知らず話しかつてゐました。その日はなれで過ぎましたが、元よりその舞踏會は王子の妃を定めるための催しとして、早速翌日お布告が出て、國中の娘達の足をしらべる事になりました。繼母は又妹、娘だけを連れて出かけて行きましたが、たくさんの女のお調べがすんでも、その靴に合ふ足の者が居ないので、母親達が呼び出されて、娘がありながら御殿のお呼び出しに出さないやうなものは重い罰にするよと云ひ渡しました。繼母は恐る恐る「私の、も一人の娘はそれはきたない女なのでございますから。」と繰り返して返し云つて姉娘を呼ぶ事を邪魔しました。が、お役人の殿しい言葉に止むなく、きたない衣服を着せたまま姉娘を連れて來ました。所が、王子は一目でそれと氣づかれ早速その靴をはかせてごらんになりますと、しつくりと、合つたので、すぐ眞珠姫の姉娘を妃として立派な御婚禮の式を上げられました。

〔訓言〕 掘けた料見を持つてゐる者はいくら巧んでも立派な者にはなれません。又優しい氣立の正直な人は、末には、立派な身分の人になります。人は目の前の難儀を悲んでばかり居ないで、正しい心掛で居ると必ず幸福がめぐんで來ます。

十二月二十六日 金貨

少し智慧の足りない男が、土の中から一枚の金貨を掘り出しました。金貨は芥だらけ泥だらけになつてゐましたが、それを見た人達はそれを五圓で賣つてくれと云ひました。所が、その男は「待て待て、今皆はこの金貨を五圓で買ふといふが、俺は一つこれをその二倍の價にして賣つてやらう。」と考へ出し、それを家へもつて行つて、砂や灰や薬で擦り出しました。男は一生懸命で、それ

を光らせましたので、見る見る内に金貨は、すっかり磨かれて、目ざむるばかりに輝き出して來ました。が、お影で目方はずつと減つて、以前の半分も、價値が失くなつて了ひました。

〔訓言〕 無能なものには何を與へても、好果はありません。

十二月二十七日 池 河

河の近くにある小さい池が、或時川に向つて「お前はいつでも御苦勞に動き通しに動いてゐるね。そしてその上背中には重い船やら時には、荷物をつぱいのせた大船やらに押しつけられて苦しうだが、私はまるで天國のやうに、いつも穩で樂々とのんびりしてゐる、船は愚かボートだつて乗りやしない、もつともそんなものに乗られた日には、苦しうつてやり切れないがね。たまた木

葉が飛んで来るぐらゐなものだが、そんなものはかへつて、寝むけざましにいい遊び相手だ。何しろ俺はお前よりは上等な身分のものさね。」と云ひ放題の事を云つて威張り散らしてゐました。大川はこれを聞いて、ふふんと冷笑しながら、『だが、お前のからだは濁つてゐる。俺はいつもかうして活動をつづけてゐるかはり、水は透き通るやうに清く澄んでゐて、つきる事はない。いまに日でもあればお前のからだは失くなつて了ふが、俺はいつ迄も、活動をつづけてゐるかぎりこの通りで居られる。』と答へました。

大河の云つた通り今なほ川は流れをつづけて居りますが、哀れな池は、毎年に水量が減つてだんだん泥が乾燥びて堅くなり、やがて草がいつぱい生えて、普通の地となり跡かたもなく消え失せて了ひました。

〔訓言〕 絶えず働くものは、いつ迄も榮えて居ります。

十二月二十八日 町の鼠と田舎の鼠

町の鼠と田舎の鼠とが知り合ひになりましたが、或る日田舎の鼠から町の鼠へ手紙が来て、田舎へ遊びに来て呉れと云つて寄こしました。それで町の鼠が出かけて行きますと、田舎の鼠は御馳走にと云つて、土だらけのお芋だの麥だのを澤山出しました。けれどもその御馳走を見て町の鼠は『君はいつもこんな物ばかりを食べてゐるのですか。こんな不味いものは只で貰つても僕達町の者は食べやしません。まあ一度、僕達の生活を見に来給へ、美味しい御馳走を食べ飽きる程差し上げるから。』と云ひました。

そこで田舎の鼠は町の鼠に連れられて、町の鼠の家へ行くことになりました。行つて見ると、なるほど、お魚だの肉だの果物だの、いろいろ美味しいものが山程、家にありますので、田舎の鼠は目を丸くして驚いて了ひました。ところ

が愈々これから、その御馳走を喰べようと思いました時、俄に家の戸が開いて怖ろしい猫が現はれましたので、二匹は周章ふためいて、狭苦しい隠れ穴へ逃げ込まなければなりません。やがて外が静かになりましたので、出て来ますと今度は人の足音がしますので、又周章して逃げると云ふ始末で、しつくりなしに、いろいろなものに駭かされますので、田舎の鼠は到頭たまりかねて、「私はもう歸ります。いくら贅澤な御馳走にありつけても、かう劔呑な思ひをする位なら、まづくてもゆつくり氣樂な氣持で、草の根や芋を喰べてゐる方がどの位の美味いか知れませんか。」と云つて、すたすた歸り仕度を初めました。

〔訓言〕 苦しい思ひをしながら、贅澤な暮しをするのは、決して愉快なものではありません。

十二月二十九日 蟻

或る處に大變力の強い蟻がゐました。と云つても蟻のことですから、さう大したことの出來ないのは勿論です。やつと米粒を二つぐらゐ持ち上げるとか、蚯蚓を刺し殺す位のが精々なのです。けれども蟻の仲間では、それが大したこととして大評判になつてゐました。それでその蟻はすつかり自分を偉い力持ちのやうに自惚れて了ひ、一つ自分の力を人間共に示してやらうと思ひました。で、百姓の草車に乗つて人の澤山ある町へやつて來ました。そして一枚の木の葉を持ち上げて、これ見よがしにあたりを見廻しました。自分では、それを見て澤山の人が集つて、自分の力を讚めて呉れるだらうと思つたのでした。けれども人間の中に誰一人見向をする者もありませんので、蟻は不思議さうな顔をして、傍を歩いてゐた犬に向つて、

「此の町の人間は、ほんたうにわからず屋の、眼なしだね。俺がこんな力業をして見せてゐるのに、誰一人見向かうとする者もないのだもの。俺の仲間の者はみんな俺の力の強いのに驚いてゐるのに。」と、云ひました。

〔訓言〕 ほんの自分の周囲にだけ聞えてゐるやうなことをしながら、英名が天下に響いてゐるやうに思ふ愚な者があります。

十二月三十日 百姓の馬

或る百姓が、それは／＼立派な馬を持つて居ました。ところが或る日のこと不圖その馬の姿が見えなくなつて了ひました。そして近くの野山を探しましたが、何處にも見當りませんので、近所の人達はその百姓を氣の毒がつて「きつと盗坊にでも盗まれたのでせう。ほんたうにお氣の毒なことをしましたね。」と

口口に悔みを云ひました。けれども百姓は別に悲しさうな顔を見せないで「なに仕方がありません。この位の災難は諦めます。」と答へました。

ところが數日して、姿の見えなくなつたその馬が何處からか、ひよつこり戻つて來ましたが、その上一頭の別な馬までお伴に連れて來ました。で近所の人達は、逃げた馬が二頭になつて戻て來たものですから「これはこれはお目出度う、大した儲けぢやありませんか。」と百姓に云ひました。すると百姓は別に嬉しさうな顔もしませんで「不意の喜びのある後には、何か禍があるものです。こんな儲けの事の起るのは却つて心配です。」と云ふのでした。

するとどうでせう、その後暫時してから百姓の言葉通一つの不幸な禍が起りました。と云ひますのは、百姓の息子が新らしく來たその馬に乗つて走つてゐる中、馬が荒れて、落馬して、大怪我をしたのです。そして足を挫いて跛になつて了ひました。近所の人達は息子が怪我をした噂を聞いて見舞に來ますと、今度

も亦百姓は平氣な顔をして『なあに、悪いことばかりがさう續くものではありません。こんな不幸が起つた後には、何か幸が恵まれるものです。それを樂みにして、今の不幸をあきらめます。』と云ひました。

戦争が始まつて、村の若者達がぞくぞく戰場に送られるやうになつたのは、それから間もないことです。ところがこの百姓の息子は足を挫いてゐますので、兵隊に徴られないで濟み、同じ村の若者達が殆ど凡てが戦死したのに、その百姓の息子だけ生命が救かりました。

〔訓言〕 禍福はあざなへる繩の如し、よい事の後は悪い事が起り、悪いことの後にはよい事のあるのが世の中の常です。

十二月三十一日 悪魔の相談

魔王 皆な集つたか？

悪魔(一同) はい私共はこれでみんな集りました。それで今日の御用は何んでムいますか。

魔王 お前達に大事な相談があるのだ。みんな一生懸命に智慧を絞つて考へて呉れなくてはいけないぞ。

悪魔(一同) それで御相談の趣は何んでムりますか、早くお報せ下さいませ。

魔王 お前等はおのAと云ふ男を知つてゐるだらう。

第一の悪魔 よく存じて居ります。あの男は人間社會に居ります。私達の親しい友達です。

第二の悪魔 あの男は酒も飲みます、煙草も喫ひます、女遊びもします。何んでも悪いことをする私達の大切な仲間です。

魔王 ところがあの男が近頃、悪いことを一切止めて、善人にならうとして

ゐるのだ。そして俺達の仲間を抜けて神様の僕にならうとしてゐるのだ。

第三の悪魔　それが眞實なら不都合な謀反人です。

第四の悪魔　なんとか懲しめてやらなくてはなりませんまい。

第五の悪魔　そして私共の仲間から抜けさせないやうにしなければなりませんまい。

魔王　さうだ。仲間を一人でも失ふのは淋しいことだ。だから、あの男が善人になれぬやうに誘惑するには何うしたらいいかが相談なのだ。それをお前達に考へて貰ひ度いのだ。

第一の悪魔　魔王よ、私はいい考へを思ひつきました。

魔王　考へついたなら云つて見るがいい。

第一の悪魔　私のはあの男に斯う申します。お前はまた世の中の樂みを十分に知つてはゐない。何うせ一生は短いのだ、なんでもいいから仕度い放題のまね

をして遊び抜かなければ損だぞ。お金も盗むがいい。お酒も飲むもいい。女と遊ぶもいい。やつて御覽、きつと面白いに違ひないから」とあの男にすすめようと思ひます。

魔王　お前の考へは駄目だ。あの男は悪いことをした後に起る、苦しさも淋しさも、もう知つてゐる。そしてその苦しみから逃れようとしてゐるのだから駄目だ。誰か外にいい考への思ひ付いた者はゐないか。

第二の悪魔　魔王よ、私のはあの男に斯う申さうと思ひます。「お前は正しい善人の生活を送らうとしてゐる。それはよからう、だがその生活の道は非常に狭く息苦しいことを知つてゐるが。それは堪へられない苦しきだ。不自由で、窮屈で、その上寂しい道だ。お前は何故お前の一生を苦しめやうとするのだね。」たぶんあの男は善人になるのを思ひとどまると思ひます。

魔王　お前の考へも駄目だらう。あの男は善人の生活につきまといふ苦しきの

中にこそ眞實の喜びや正しい樂しみのあるのを感じてゐるからな。誰か外にな
いか。

第三の悪魔 私は思ひます。私は先づ初め、あなたは實にいいお心かけをお
持ちだと讃めてやります。私は先づあの男が善人になることを賛成して置いて、
それから斯う云つてやります。『あなたは、これから善人の道にお入りになるの
でせう。さうすればもう私達ともお別れです。まあさう急がずに緩り私と話し
てから、善人におなりなさい。』かう申せばきつとあの男は氣をゆるめてぐづぐ
づしてゐるでせう。さうして知らぬ間に月日を過たせて了ひませう。

魔王 なるほど、それはいい考へだ。もう一日もう一日と云つてゐる中に月
日はどんどん過つものだ。思ひ立つたことは、思ひ立つた時すぐしなければな
かなか出来るものではない。あの男を誘惑するには、その方法が一番だ。それ
ではみなもの者、今日の相談はこれでお終にして、あの男を誘惑する役目は、第

三の悪魔に命するから上手くやつてくれ。

〔訓言〕

悪事を悪事と悟つて、それを改めようと思ひ立つ

たら、直ぐに改めないとなかなか改められないものです



日本評論社出版

大正十年十一月十日印刷
大正十年十一月二十八日發行

定價金貳圓參拾錢

不許複製
お伽論語製

編者 渡平民

發行者 茅原茂

印刷者 荻原勝次郎

東京市本郷區弓町一丁目廿五番地

日本評論社出版部

電話小石川一九七八
振替東京九六七八

◆圖書總目錄——往復ハガキ申込次第進呈

世界童話傑作叢書

| 編 一 第 | 編 二 第 | 編 三 第 | 編 四 第 |
|---|--|--|---|
| 茶碗の一生 | 魚の舞踏 | 漁夫の指輪 | 蜜蜂姫 |
| 料五拾五錢送圓 定價拾壹圓 譯福永挽歌 | 料七拾五錢送圓 定價拾壹圓 譯福永挽歌 | 料七拾五錢送圓 定價拾壹圓 譯福永挽歌 | 料七拾五錢送圓 定價拾壹圓 譯福永挽歌 |
| 露國ウオルホーフスキー著 此は平凡なお伽斯ではない、子供ばかりが讀む童話でもない、書中の諸篇悉く無機物を假り來つて、悉く之れを人格化し、偉大なる或るものを含有せしめた民衆的藝術品である。 | 露國クロイロフ著 第一篇の「茶碗の一生」は世界的に何物かた憶する慧く鋭い高級な少年讀者を満足させた。本篇に至つては更に深刻、更に清新そして多量な物をなした。本篇に於ては、更に深刻、更に清新そして多量の寶玉の尊さがあつた。 | 瑞典セルマ・ラゲルロフ著 第一篇「茶碗の一生」は北歐の代表的童話「漁夫の指輪」の外七篇を紹介致します。今度の「茶碗の一生」は、有名な丁抹のアンデルセンの作よりもモット美しくモット力があるものです。 | 佛國アナトール・フランス著 蜜蜂姫——學校——紫陽花——村の子供—— ロージャヤの馬——勇氣 |

秋田雨雀著 沖野岩三郎著

童話
 東の子供へ
 頰白の歌

西村アヤ子装幀及挿畫 竹久夢二装幀落葉挿畫

「金の船」は本書を評して、「この頃出た童話集中で最も立派なもの」の一つです。この著者は童話専門作家として立つてゐるだけに中々骨を折つて書いて居られる。面白い話と云ふよりも本當に子供の爲めになる話を書くのがこの著者です——と。世の慈悲深き親達におすゝめ致します

定價金貳圓。送料十五錢

高い山の上に、紅や白の美しい花の咲き亂れた。大きな大きな不思議な樹があつた。其の枝には可愛い頰白が「一筆啓上つきむき候……」の歌を、節面白く歌つてゐる。歌があんまり面白いので花の下には種んな物が集つて來た。川から這ひ出た黒坊主、熊の腹から飛び出て來た赤ちやん鼠の行列を見に行つて高い石垣から落つこちた小僧さん腕に怪我して纏帶した小さい栗鼠大きなお腹を太鼓にして踊り疲れた古狸そして皆なが聲を揃へて頰白の歌を面白いくと言つた。——定價金壹圓七拾錢。送料十五錢——

賜天覽・溝口白羊謹著

東宮御渡歐記

文部省通俗圖書認定

乾の巻

〔附録 御外遊陪從の記 特派記者 加藤直士〕

東宮殿下の御渡歐は、日本空前の大なる歩みを意味し、東西二大文化融合の實現機會を意味す。斯の如き世界的の事實は必ず之を權威的記録に留めて永く後世に傳へざるべからず。『明治神宮記』並に『國辱記』の著者白羊氏、乃ち憂國至誠の熱情を其靈筆に籠めて東宮御渡歐の大精神を説き其御行途の跡を宛ら目前に觀るが如く記し奉つて各所御寄港の風光、生産物、在留邦人、景色其他に及び、此の曠古の盛儀を永く後昆に傳ふべき寶典たらしむると共に國民教化の資料たらしむるを期す

（御發途より英國・御渡佛までの記）
四六判・總ク羅斯・天金函入美裝
本文四百七十頁・寫眞アクト刷百餘枚
定價金參圓五拾錢 送料十七錢

坤の巻

〔附録 歐洲人の眼に映じたる東宮殿下〕

（英佛伊各御巡遊國の御評判記）
歐大陸御巡遊より御歸朝迄の全記
四六判・總ク羅斯・天金函入美裝
本文四百七十頁・寫眞アクト刷百餘枚
定價金 四圓 送料二十七錢

露光量違いの為重複撮影

50/

22/

12.5. 11

露光量違いの為重複撮影

57/
221

終

